NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 22・2010. 11.31

・平成22年度「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅠ
　Bコース（8月31日～9月12日）　開催報告
・保存修復の現場から　最後の「鎧修理師」として
・伏流水　東京藝術大学大学院　保存科学研究室
・書籍紹介　『南伊豆を知ろう会2009』
・JCP事務局通信

東京藝術大学

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」

平成22年度 「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅠ

Bコース（8月31日～9月12日）開催報告

平成20年度からスタートした「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」は、今年で3年目を迎えました。今年も芸術文化振興基金と（財）文化財保護・芸術研究助成財団の助成を受けて、8月末からの2週間、レベルⅠコースを開催しました。11月にはいよいよレベルⅡを開催する予定です。

それぞれのレベルは2ヵ年連続で行いますが、今年のレベルⅠはBコース。今年2年目の2期生と、新規募集した3期生35名が受講しました。

今回は、Ⅱ期生2名とⅢ期生1名の方から受講の感想をお寄せいただきました。皆様のご意見を参考に、より有意義なセミナーの展開に向けて改善努力をしていきたいと思っています。

今回ご協力いただきました講師の皆様、NPO法人 たいとう歴史都市研究会の皆様、見学をさせて頂きました森美術館、東京藝術大学院大学院美術館、同大学大学院美術研究科保存修復油画研究室 木島隆康先生、そして共催者として、会場を提供してくださった東京国立博物館へ、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」を終えて

渡辺　美紀

2009年8月31日から9月11日までの10日間と2010年8月30日から9月10日までの10日間、2年で合計20日間の講義を受講し、レベルⅠ課程を修了する事が出来ました。2008年に開講された文化財保存修復専門家養成実践セミナーのⅡ期生にあたります。2009年はⅡ期生のみ29名でしたが、2010年にはⅢ期生も加わり、34名での受講となりました。

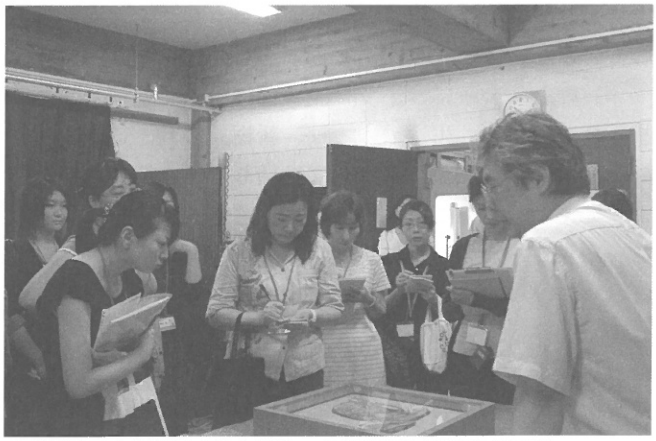
20日間の講義は、文化財に使用される素材の化学的知識から、保存環境の管理に関する内容、また特別講義では文化財保護法の歴史と、様々な分野にわたるものでした。また、油彩画、染織品、石材、考古資料など、文化財の形態毎の専門的講義もありました。それぞれの講義では、技術的な知識を増やすだけではなく、修復の作業や組織を作り上げるまでの経験談など、各分野の第一線で活躍される先生方から直接お話を聞くことができる貴重な機会でした。

授業は座学だけでなく、補彩や木彫等の実技、美術館見学、町歩きなど、実際に体を動かして体験するもの、また東京国立博物館内で実際に作品や展示環境を見ながらの講義もあり、より理解を深めるのに役立ったと思います。博物館の作品には触れることはできませんが、いくつかの講義では、先生が用意してくださった作品を受講生が直接手にとって観察したり、調査器具を使用したりと、様々なスタイルで授業が行われ、どれも興味深い内容でしたが、人数が多いと、移動に時間がかかったり、一人ずつ全員が何かをするために待ち時間が長くなる、あるいは一人に割り当てられる時間が短くなるなどの問題があります。受講生は、より多くのことを学び、吸収したいという思いがあるので、できればもう少し少ない人数で受けられたらと感じました。

受講風景

幅広い分野にわたるのは講義内容だけでなく、受講生もまた様々で、修復家として働かれている方、専門学校や大学で勉強中の方、専門分野は保存化学、装こう、油彩画、考古学等と多岐にわたります。先生方からの講義だけでなく、一緒に学ぶ受講生からも工房や材料等の現場での話や、学校の様子などを聞くことができ、情報交換の場にもなりました。

私が勤務する貴重書図書館の保存修復工房では、所蔵する西洋古版本の劣化調査、修復処置や保存容器の製作を行っています。近年、書籍のデジタル化が進み、お金と時間をかけて修復してまで紙の本を残すことに疑問をもたれる方がいらっしゃるかもしれません。実際、講義の中でもオリジナルを残すことの意味について触れられていました。1冊の本にはそこに書かれたテキストだけではなく、製紙技術、印刷技術そして製本技術等も含まれます。また、研究者によって書き込みをされたものは、同時に出版された他の本とは異なる、唯一の1冊となります。それらをできるだけオリジナルに近い形で残し、より多くの情報を閲覧



受講風景（東京藝術大学大学院　木島隆康先生研究室にて）

谷中の建物保存現場の見学（協力：NPO法人 たいとう歴史都市研究会）

国立東京博物館館内施設を使ってのIPM講義

者に提供するためには、やはり保存修復作業は必要だと考えます。

2年に渡るセミナーでは、日々の業務に直接関連する内容の講義もあれば、いつかどこかで間接的に役立つかもしれない内容もありました。しかし、すべての講義に共通していたのは、先生方が熱心に話して下さったことです。分野によっては始めて見聞きする内容でも、興味を持って楽しく聞くことができました。このセミナーで得た様々な知識、経験を今後の業務に活かしたいと思います。

レベルⅠ課程を修了し次はレベルⅡ課程ですが、仕事の都合で今年は受講できませんでした。次回のレベルⅡ課程の開催と、そこでまた受講生の仲間と会えることを楽しみにしています。

文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ前期に参加して

東洋美術学校・造形美術科高度保存修復専攻3年　木本洋祐

本セミナーに参加する動機、目的は各人各様であったことと思います。

今回の参加者の所属を拝見すると、約3分の2が大学生、大学院生、専門学校生といった学生、約3分の1が博物館や資料室、表具店、工房等で文化財や紙資料等の保存修復に携わるプロの方々という構成でした。

文化財保存修復を学問研究の対象としている学生（大学・大学院生）の皆さんの参加目的は、自らの専門領域に関する総合的な知見の獲得、保存修復の世界を牽引する講師の方々の生の声を聴くことで自らの理論の肉づけや研究の方向性にヒントやアイディアを求めることにあったのでしょうか。

また、私もそこに含まれるところの専門学校生は、その分野への就業を前提として知識と実技を学ぶ身ですから、「文化財保存修復専門家」となるために今まで学んできたことに加えて何が必要とされるのか是非とも知っておきたいわけです。さらには就業への道を開くパスポートを得たい、業界関係者とのコネクションを作りたいといった、言わば「就活」的な意味合いも少なくなかったのではないかと思います。

さて、専門学校での学習が「広い」ジャンルに及ぶものの、やや「浅い」感が否めず、「専門家養成」と銘打って行われる本セミナーの内容がどのようなものか期待したのですが、1コマ3時間という時間的な制約もあり、概観的総論的な内容が多かったことは「レベルⅠ」においては当然のことであったと思います。

そのような中で特に印象に残ったのは、森美術館、東京藝術大学大学院木島康隆研究室・同大学美術館、たいとう歴史都市研究会等の「見学」と、「特論（三輪、歌田、神庭の各先生）」における、プロフェショナルの方々の体験談や苦労話でありました。今後もこのような「現場の生の声」を聴ける貴重な機会を増やしていただきたいものです。

「基本修理設計」に関しては、各ジャンルの講師の方々によって講義の組み立て方が異なっていました。「レベルⅡ」以降においては、各ジャンルで、修復を前提とした作品の事例解説を中心に掘り下げた各論が欲しいところです（選択科目にすべきでしょうか）。

コミュニケーションの面に関して。53歳という年齢で男性であるというマイノリティ性に加えて性格もあり、休憩時間中に周囲とフランクに情報交換することはままなりませんでした。そんなわけで、セミナー最終日に市田邸で開かれた懇親会で、初めて受講者の方々や講師の先生方とコミュニケーションを図ることができたことは誠に喜ばしく有意義ではありました。

今回、全体カリキュラムの半分に参加しただけで感想や意見を述べるのも僭越でしたが、このセミナーが、修復に関わる実務家のベーシックな知識・技能を保証し、スタッフ雇用の実質的な要件となりうるような文化財保存修復に関する資格制度に繋がるものに発展することを切に願いつつ筆を擱きます。

「文化財保存支修復専門家養成実践セミナーに参加して」

首藤　弘樹（首藤弘文堂／JCP登録会員）

このセミナーは、地方に優しい行事だな、と思いました。中央には各分野の一流の先生が多数集まっていますが、日本中、県庁所在地以外の地方は人材不足であると思います。そうした現状の中、これだけの一流の講師の先生方に広く知識を戴けた事は、大変意義があります。

私自身は大分県の地方で、装こう※1の仕事をさせていただいていますが、帰郷してすぐに地元の学芸員さんと食事をしながら意見交換をしたり、また、町づくりのメンバーと意見をやり取りしたりと言う具合に、垣根を作らずあらゆる分野の人材と話ができるようになれた気がして、大変感謝しております。

私事ではありますが、以前よく師匠から、「仕事だけではいけない、何か稽古事か趣味を持ちなさい。でないと人としての幅が狭くなる」と言われていました。その頃から茶道と謡曲を細々と続けてまいりました。その意味も、やっとこの頃分かってきたような気がします。仕事では勿論、人材としても、地域のはずせない歯車になれるよう、精進していきたいと思います。

今回のセミナーに、小麦粉澱粉糊についての講義がありました。私自身、生沈糊の古糊、新糊、それと乾燥した新糊を使用した経験から、生沈糊は粘りがあり接着力が強いようですが、乾燥糊の新糊は少し接着が弱いような気がしていました。そこで先日製造元に尋ねてみました。すると、乾燥小麦澱粉糊は、作る過程で高温の熱で瞬間的に乾燥させるらしく、その時すでに芯の部分が糊化してしまうのでは、とのことでした。そのために、乾燥小麦澱粉糊を炊いても粒子の数が一定以上の細かさにならないのでは、と思い、先日京都造形芸術大学准教授の大林賢太郎さん（セミナー講師、NPOJCP副理事長※2）に相談したら、今度調べてくれることになりました。

皆様のお蔭で今現在、この時を過ごせる事、感謝いたします。有難う御座居ます。

※1　装こう：紙や絹に書（描）かれた文化財を修理する技術。技術者を装こう師と呼ぶ。
※2　事務局注

保存修復の現場から

最後の「鎧修理師」として

はじめに

「私は修復技術者ではなく職人です」

平成21年の「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」において、「金工の修理設計」というテーマで、鎧修理の専門家　小澤正実先生にご講義をお願いしました。その講義の開始直後、開口一番に小澤先生が仰ったのがこの言葉です。

現在の文化財修復・保存の世界においては、「職人」を自称する人はマイノリティーになりつつあります。本セミナーも、「国内外で活躍できる『修復技術者』や『保存専門家』を養成する」と謳っています。それを百も承知の上で、あえて「職人」を名乗る小澤先生に、相応のプライドと覚悟を感じました。

「職人」とは何か？　なぜ「職人」なのか？　そんな思いで後日先生の仕事場を訪ね、改めてお話を伺いました。

1.鎧の修理技師を目指し

小澤先生は昭和28年、横浜生まれ。高校卒業後、当時東京国立博物館内の地下で鎧の修理をしていた牧田三郎先生に弟子入りし、この道を歩き始めました。その後正倉院宝物の「紺玉の帯」（聖武天皇ご佩用）や、国宝「沢瀉威鎧兜、大袖付」など、文字通り国の宝の修理に携わってこられました。

Q：先生がこの仕事に興味を持ったきっかけは、NHKの大河ドラマ「太閤記」と伺いました。武将が身につけていた甲冑に目を奪われたとか※……でも、甲冑のどこにそんなに惹かれたのですか？

小澤先生：「好き」に理由はありません。小学校5年生頃から、記憶を頼りに厚紙で鎧を再現して遊んでいました。好きの一念で鎧の仕事に携わりたいと高校の先生に相談したところ、博物館に問い合せてくれて、牧田三郎先生を紹介されました。それから週に一度工房へお邪魔して、東京国立博物館や文化庁の先生方にも面識を得、皆様が私を技術者として育てようとして下さいました。

※週間朝日百科「国宝の美」連載「私と国宝」参照。

Q：修業は何年ぐらい続いたのですか？

小澤先生：昭和47年、牧田先生に正式に弟子入りし、東博

小澤正實先生プロフィール
昭和28年　横浜市生まれ
昭和46年　選定保存技術保持者　牧田三郎に師事
昭和47年～51年　宮内庁正倉院御物の修理及び模造制作助手
昭和59年　牧田三郎の引退により東京国立博物館内修理室を継承
平成2年　ベネチア東洋美術館・武器・武具類調査
平成4年～　埼玉県立博物館資料評価委員
平成10年　選定保存技術保持者認定
平成14年～16年　宮内庁正倉院・宝物調査員

整理されて収納されている組み紐の数々。すべて鎧の部材となる。

地下の工房へ通うようになりました。昭和51年、牧田先生が第1回目の選定技術保持者として文化庁より認定を受けた際、私を後継者と明言して下さいました。昭和60年、先生が80歳になられて引退を表明された時、工房を継承させて頂き、独立することになりました。
ですから13年ですね。

Q：牧田先生から受けた教えはどのようなものでしたか？

小澤先生：先生は非常に穏やかな方で、一度も叱られたこともなく、つらいと思ったことはありませんでした。未指定品を練習代にさせてもらったので、正攻法の仕事だけではなく、応急修理などに役立つような方法も教えていただけたのは良かったと思っています。鎧は多種多様な材質からできているので、それらに対応できる知識も教えていただきました。鍛金、漆、針仕事……なんでも広くできなければなりません。

2.「職人」という言葉の意味について

Q：修理をする際に心がけていることは何ですか？

小澤先生：指定品を「修理」したと思ったことはなく、「補強」だと思っています。建造物などと違い、鎧や刀は現代において使用目的はなくなっています。文化財として、最小限今ある状態を後世に残していかなくてはならない。切れかかっているところを取る必要はないし、取れているところも補強で済むならそれでいい。となると、修理後の外観が変わらない現状維持が最良です。国宝や重要文化財など名品の修理は、批判は出ても褒められることは皆無です。「やらなければよかったのに」「もっとやればよかったのに」という批判に耐えうる修理は、大変難しいところです。なるべく現状を変化させずに、強度を保たせることに主眼を置いています。

紐の左に掛かっているのは、鎧をつり下げる道具。右は革紐。

Q：お話を伺っていると、近代的「修復技術者」を自称する人たちと、基本精神において同じだと思いますが、あえて「職人」を名乗られるのはなぜでしょうか？

小澤先生：修復技術者は、いろんなことを学んでこられた方という感がありますね。美術史だとか、化学だとか。私は先生から教わってきたことだけですから。今の修理では報告書などの添付が求められますが、私には修理と報告書作成の両立は難しいです。

Q：余分なことを排除して、ひとつの道に進むという誇りを持っていらっしゃるのですね。

小澤先生：そんな大袈裟なものではありません。時代遅れの今のやり方が駄目だといわれたら身を引くしかないし、それで良いといわれたらもう少し続けさせて頂く。本当に自然体です。

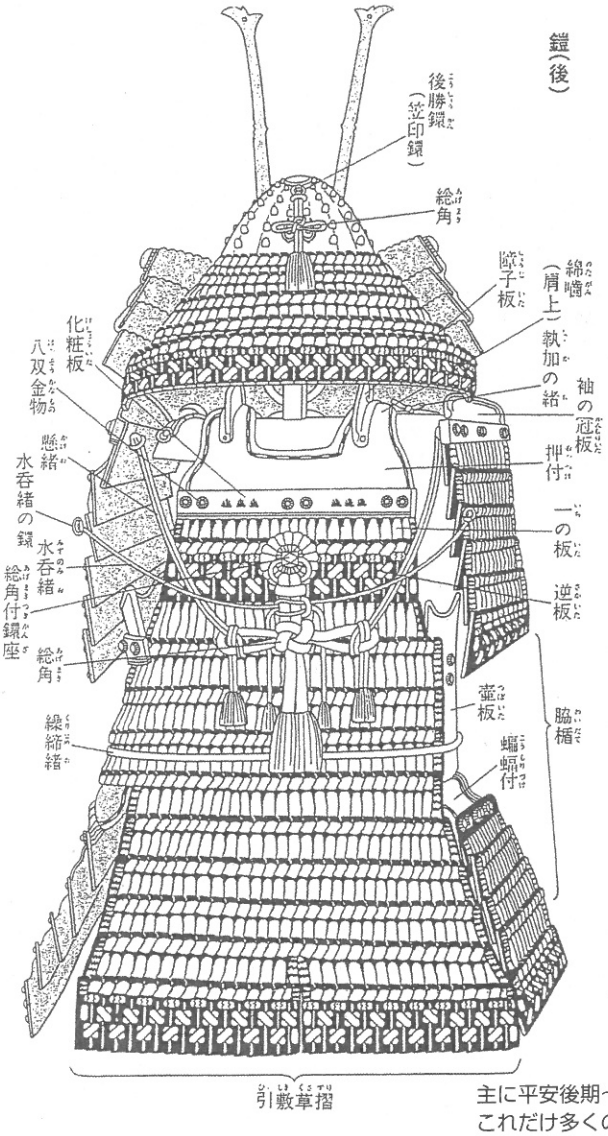
3.「ひとり」というスタイル

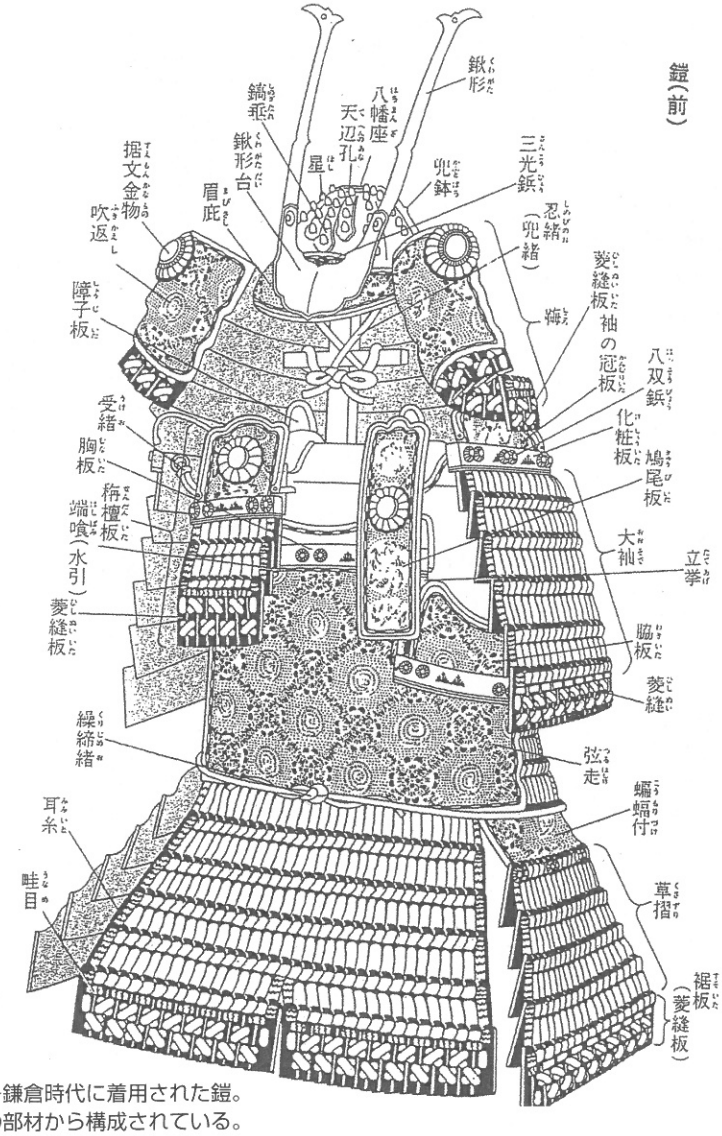
Q：小澤先生は今まで弟子を取らずに、35年間ずっとひとりでやっていらっしゃいました。それは何故ですか？

小澤先生：私の場合、人と一緒にやると集中できない。器が小さいのです。しかしひとりでやるとなると、自分の責任でやり終えなければならない。工房と違って全部ひとりの責任です。鎧を預かって解体して無事に納めるまで自分ひとりです。自分に何かあれば、関係者全てに迷惑がかかる。ですからひとつの修理が終わるまで次の修理は行いません。

Q：特に大変だと思われることはありますか？

小澤先生：国の補助事業は4月1日から翌年の3月31日です。年度末近くに修理品が来ることもあり、それから材料や部品を注文しても間に合わない。だからと言って事前に受注を予想して発注すると、仕事が来ないこともある。修理品は一点ものなので、発注した材料を他に使いまわすことができません。採算面でも非常に難しい仕事です。特に現在は制度的に変化してきて、仕事の前には修理仕様書と見積書を作り、修理中は工程写真を撮って記録を取り、最後は報告書を作る。その一連の流れが修理と言われています。





主に平安後期～鎌倉時代に着用された鎧。
これだけ多くの部材から構成されている。

発注者にとっては、文化財の修理でも道路工事でも同じ公共事業です。昨今の風潮では、対外的な透明性を確保するために、前述したような書類の提出が求められます。これらの要求に応えるためには、会社のような組織でないと難しくなってくるのではないかと感じています。私のようにひとりで朝から晩までやってきて、修理以外の仕事に技量のない人間は、文化財の世界ではある種お荷物になっているのでは、と考えます。

4.技術の継承について

Q：お弟子さんはとらないのですか？

小澤先生：私が修業をした頃はすべてがおおらかだったので、個人蔵などの仕事も受け入れ、それが練習代になりました。今日では指定品に関わると、他の仕事ができないこととなります。今は公的機関の施設内で仕事をしていますので、指定品を中心とした作品以外は請けられません。練習代になるものもないという状況です。ですから先のことを考えるととても弟子を取るという状況ではありません。今は自分がいつ、どのような形で身を引くべきなのか、ということばかり考えています。

Q：先生がお辞めになると、文化財としての鎧の修理技術者はいなくなってしまうということですが？

小澤先生：材料生産者もやはりひとりで生産しています。そういう方々も跡継ぎがいない。私の方で仕事が有ったとしても、韋や外注部品などの材料がなければもうできません。

なぜ材料生産者に後継者がいないかというと、生活ができないからです。生業が立たなければ子供には継がせないでしょう。私も同じです。

Q：国の支援はないのですか？

小澤先生：選定保存技術保持者として私的流用のできない補助金を頂いていますが、公明正大に使わなくてはならないので、4月に申請書と見積りを出し、1年間で必ず実行して、3月の段階で収支を0にして領収書と実績写真を添付した報告書を出さなければなりません。書類作成が苦手な身にとっては大変に負担です。

そこで、一般の方でも理解できるような工程見本を制作することにいたしました。

5.人間本来の仕事

「今は事務能力がないと何の仕事もできません」と小澤先生は仰います。

かつては生活の細部にわたり、様々な職業が存在していました。たとえば駅の改札で切符を切っていた駅員さん。あのワザは人間離れしていました（見たことがある人は、

1980年代生まれ迄でしょう)。今、ラッシュアワーの乗客の切符を、一人残らず華麗に入鋏できるJR職員がいるでしょうか？　手仕事はどんどん機械に取って代わられ、人間が携わる職業といえば頭脳職に絞られてきている感があります。その結果、向上心と長い修業によって人間業とは思えない技術を磨いてきた人々が社会的弱者に陥るというのは、人間社会として正しい方向なのでしょうか？

どのような産業ロボットにしても、人間の動きを模範にして作られています。社会がその人間力に対するリスペクトを失えば、努力によって技術を獲得しようとする人間は消えてしまうでしょう。それは人間の退化と言えないでしょうか？

「その代わり、比較的時間が自由になる職業だったため、家族の介護のときなどは十分にすることができました」そう語る小澤先生に、現代社会が失いつつある「人間としての正しい生き方」を見る思いがしました。

6.最後に

現在の社会の流れは、文化財修理技術という付加価値の部分にも、見積り・入札という数値化を求めています。

「お医者さんに行って、手術の前に見積りを出せますか？　開復してみたら出血がひどく、輸血など行った場合でも、医療ではかかった分だけ当然請求できますよね。掛け軸だって、解体してみたら見た目より劣化がひどかった、などというケースが多いと思います」と、小澤先生。

医療と同じく、「文化財」を守り伝えるために、国もいくつかの保護策を打ち出しています。それでも今はまだ、健康保険ほどには制度がうまく機能していないと言うことでしょうか。

現在の修理において、仕様書の作成や記録取り、報告書の作成が必要なことは十分理解できます。しかし小澤先生のお話を伺うと、個人の技術者にそれを要求するのはいかにも酷なことに思えてきました。現在当機構では、適正な価格による適正な技術を提供することをひとつの目標に掲げていますが、同時に事務的なサポートを提供することも重要なことだと気付かされました。

これから、文化財修理の世界はどのような方向へ向かっていくのでしょうか？　我々が行っているセミナーでは、国際的に通用する、いわゆる近代的な修復技術者、保存専門家の育成を目指しています。しかし、どんなに社会のシステムが変わっても、ひとつの技術をひたすら磨き、己を無にしてものに対峙してきた小澤先生のような技術者によって、文化財が継承されてきたことを忘れてはならないと思います。

現代の社会で、こうした実直な生き方は、生存権を脅かすほどの困難さに直面しています。それでも「技術を残してくれ」「後継者を育ててくれ」というのは、景観が美しいから暑くても寒くても江戸時代の家に住んでくれ、と要求しているようなものかもでしょう。それは美観地区に一時訪れては去っていく、観光客の身勝手な欲求に過ぎません。

「私の代で東博内修理室はたぶん終わりです」ときっぱり仰る小澤先生の姿には、散り際の美しさを何よりも重んずる武将の美学を彷彿とさせるものがあります。私たちは、その前になす術もなく立ちつくすしかないのでしょうか？

皆様は、どう思われますか？（文責：事務局　八木三香）

伏流水（ふくりゅうすい）　日本における人材養成の現場から

第Ⅵ弾

東京藝術大学大学院

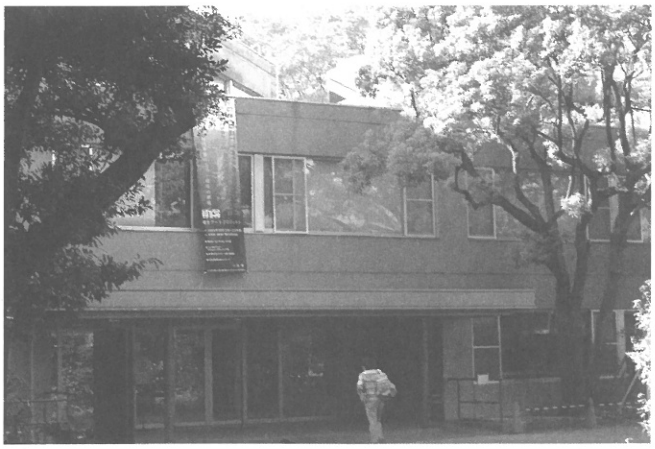
保存科学教室

（レポーター：事務局　M. Y.）

一流の矜持、一流の謙虚

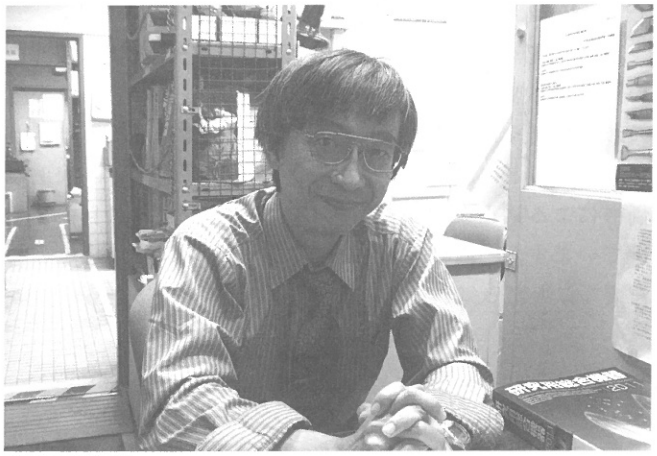
現在の日本の文化財保存・修復の世界を担う主だった研究者・専門家を輩出してきた東京藝術大学大学院　保存科学研究室。文化財が今日のようにクローズアップされるずっと以前から、同研究室は文化財を対象とした研究教育を行い、際立った人材を育成してきました。保存科学という名称を掲げたのは昭和41年のことです（※1）。

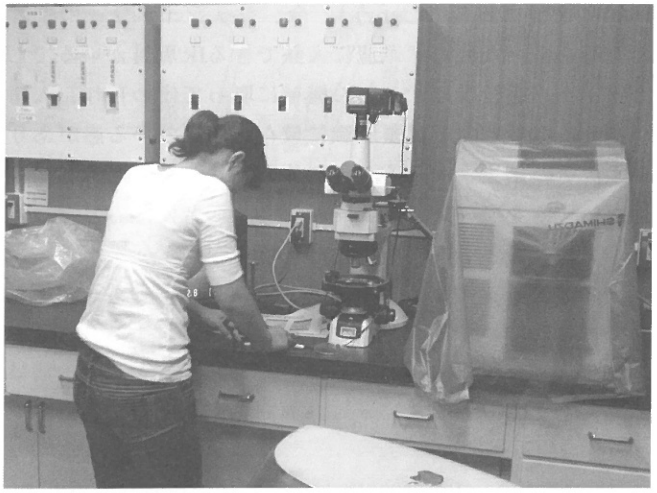
その原点はどこにあるのか？　なぜ芸術大学に科学研究室なのか？　平成22年9月、東京藝術大学大学院 保存科学研究室を訪ね、桐野文良教授にインタビューを行いました。

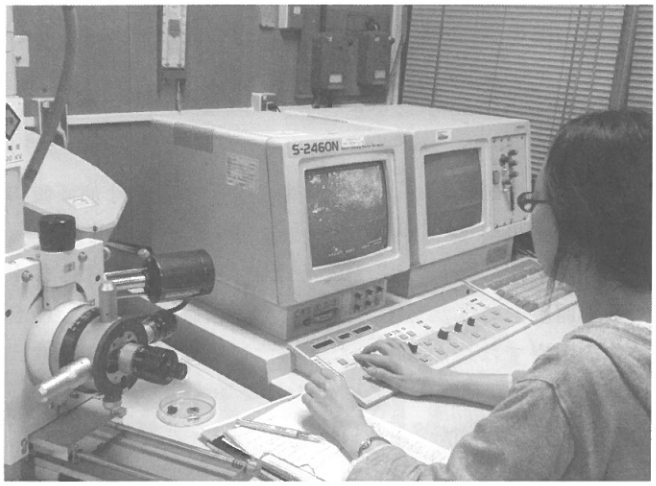


■沿　革

東京藝術大学大学院　保存科学研究室は、昭和41年（1966年）に発足します。しかしその歴史は古く、明治初期の同大学設立時に遡ります。当時、西洋からもたらされた新材料・技法の研究・開発が進み、東京美術学校（東京藝術大学の前身）でも先端科学の必要性が考慮され、創立後間もなく


桐野文良教授


偏光顕微鏡を操作する学生。



走査型電子顕微鏡。

工芸化学教室が創られました。

昭和の初め頃、同教室は金属材料研究室と名称が変わり、昭和32年に工芸材料研究室となって、美術・工芸材料全般を対象とした講義が行われるようになりました。

昭和41年、材料学研究室が大学院講座・保存科学研究室となり、当時としては最新鋭の電子顕微鏡を導入し、研究に取り組むようになりました。

そして平成7年、独立専攻の文化財保存学が設立され、保存修復分野、保存科学分野、システム保存学分野が設置されました。時に平山郁夫学長の時代です。いよいよ文化財がクローズアップされ、あちこちの大学が漸く文化財学科を設置し始めた時代でした※2。

■組　織

保存科学研究室は、文化財測定学研究室と美術工芸材料学研究室に分かれています。現在の教授陣は稲葉政満教授（紙）、桐野文良教授（金属）、永田和宏教授（鉄冶金学）、アンドラス・モルゴス招聘教授、教育研究助手4名という陣容。ゼミは合同で行い、異分野の垣根を越えて知識を習得できるよう努めているそうです。また、藝術大学としての性格を最大限活かし、保存修復・システム保存学の研究室のみならず、創作分野の教室とも密に連携し、芸術品の材料測定や組成分析の研究を活発に行っています。また、発掘調査団も保存科学研究室の傘下にあり、上野の地の発掘調査を行っています。

■教育方針について

インタビュアー：東京藝術大学大学院保存科学研究室は、現在の文化財の世界を中核で担っている錚々たる人材を輩出しています。他大学との大きな違い、教育方法とはどのようなものですか？

桐野先生：我々の誇りは、学生が皆目的意識をはっきりと持っているところです。中には安定した会社勤めを辞めて入学してくる人もいます。まず大学院の入試で、目的意識をしっかり持った人材かどうかを見極めます。東京藝術大学といえども保存科学という専門性を活かした分野で就職が厳しいのは同じです。それでもどうしても文化財を研究したい、という強い意欲を持った人間を選びます。

イ：芸術大学というと、イメージとしては人文科学です。受験してくる学生は自然科学系の方が多いのですか？

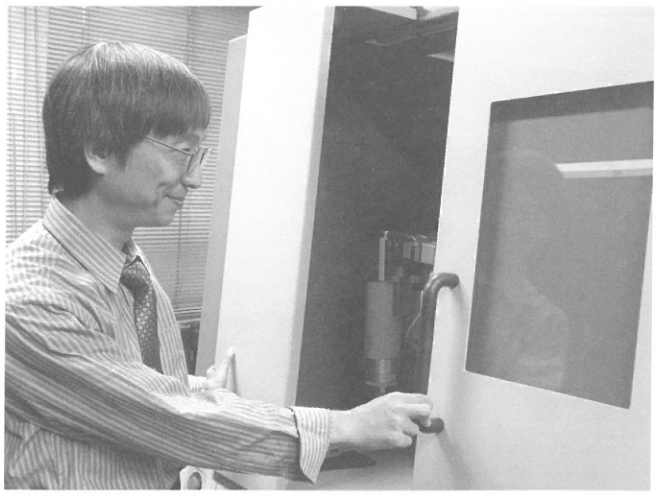
桐野先生：保存科学は大学内に学部を持っていません。従って大学院の受験生は、殆どが他大学の出身者です。また約半数が文系出身者です。そうした学生に、自然科学の目で見られるよう教育を施しています。先ほども話したように、ゼミは各教授の専門の垣根を取って合同で行い、材料について広く学んでもらいます。それによって、将来どんな素材にぶつかってもある程度対応できる知識が身に付くのだと考えます。保存科学は保存科学だけで存在しているわけではなく、修復技術や創作部門とコラボレーションしてこその保存科学だということを忘れてはなりません。その意味で、必ずしも人文系出身の人間が不利というわけではありませんし、理系有利とも限りません。

イ：目的意識が強い、と仰いましたが、例えばどんな目的を持って受験してくるのですか？

桐野先生：やはり研究者か学芸員でしょうか？　しかし学芸員の就職口は皆無に近いですが。

イ：就職の問題は各大学共通ですが、東京藝術大学出身でも難しいのですか？

桐野先生：難しいですね。学芸員はひとり雇えばその人が定年退職するまで新たに雇う枠がないわけですから。です



低角入射X線回折装置（薄膜X線）結晶構造を調べるもの。

から、「文化財を守りたい」という強い使命感がなければやっていられない。単なる憧れでは生きて行けない世界です。

その点、職につくまでの間、隣の東京文化財研究所や東京国立博物館などが非常勤などの身分で置いてくれるのは、大変ありがたいことです。そうやって、研鑽を積み、なんとか職を見つけて出て行けるのは、先輩が皆社会に出て良い仕事をしているからです。

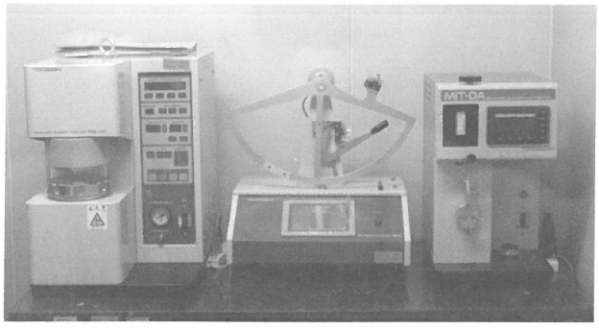
イ：ある時から潮流に乗って文化財学科を創設した大学は、ブームが去って、学生も減って、今度は縮小傾向にあるようですね。

桐野先生：工学部を持つ大学で、この分野への参入を図っている所があるようです。でも研究対象があってこその保存科学ですから。資料を収蔵しているわけでもなく、東京藝大のように修復技術研究室や制作を行う芸術系学科などがなければ、成り立たないと思いますよ。

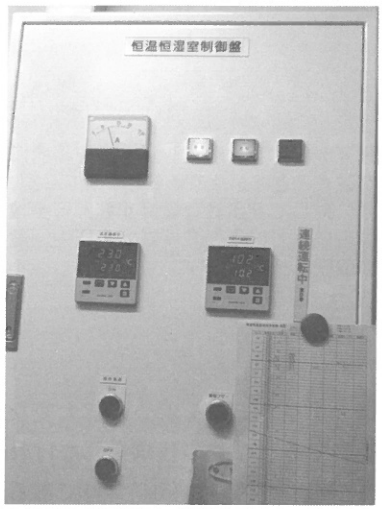
イ：最高学府に入れるほど優秀な人材が、そこまで苦労しても文化財を研究対象としたいというのは、それだけ文化財が価値を持っているからなのでしょうね。よく文化財は「お宝」の世界と誤解されますが、国立（現在は、独立行政法人化して国立大学法人）藝大に文化財専攻があることで、文化財が国を挙げても保護されるべき価値があることが証明されていると思います。

桐野先生：日本では明治維新後も、人々は食べて行くのが精一杯で、文化まで力が及ばなかった。かつてミュンヘンに出張した時、16世紀の建造物が残っているなど文化層の厚さに圧倒されました。この他にも、ヨーロッパでは、実生活では全く不必要と思われるラテン語を、皆教養として身に付けようとします。

イ：そのような中で、すでに明治時代、文化財を見据えた学科を設置したのは岡倉天心ならではですね。日本全体にそのような意識が広がれば、文化財に関わる仕事は活性化するのでしょうが。でも社会一般はまだまだ「文化財って何？」という世界だと思います。東京藝術大学に対しても、高嶺の花という感覚が一般的ではないでしょうか？



紙の強度試験器・左から、紙の破製試験器。紙の引き裂き試験器。紙の耐折試験器。



恒温恒湿制御板。恒温恒湿室の環境を保つ。紙・布の試験をする。

桐野先生：情報公開に関しては、退官した北田正弘教授（現、名誉教授）が力を入れていました。保存科学研究室の年報を発刊したのも北田先生です。また、北田先生の発案で10年前から研究室の研究発表会を開催しています。この発表会は、どなたでも参加して聞いていただくことができます。研究者は自分の世界にこもりがちですが、それではいつまでも社会の理解を得ることはできませんからね。当研究室の成果を世の中に見ていただくことが文化財を理解していただく上でも大切であると考えています。

■一流（プロ）ということについて

イ：桐野先生は、なぜ文化財の道に入られたのですか？

桐野先生：本当は大きなものを動かす仕事がしたかった。実はパイロットになりたかったのですが、視力が足りずに断念しました。大学を受けるとき、歴史と化学とどちらか迷いましたが、結局化学を選びました。なぜかというと、歴史は自分でも勉強できますが、化学は実験を伴うので一人では勉強できない。高校は都立校、大学は東京都立大（現、首都大東京）でしたが、指導教官が大学院は外へ出すという方針でしたので、東工大の大学院へ行きました。

その後日立に就職し、金属の錆や情報記録材料の研究をして20年勤めました。

イ：それから東京藝術大学へ？　企業での経験は生かされていますか？

桐野先生：企業時代の上司から、プロということについて叩き込まれました。仕事をして金をもらうということは、その道のプロだからなのです。芸術系は下手をするとカルチャーセンターになってしまいますが、藝大がそうなってはいけません。それで食べていくという気迫がプロです。今私は学生に教えて金をもらっている。教えた学生が世の

中に出て行ってそれなりの役割をはたすよう教育するのが役目です。ただ数年間研究室に置いて押し出すのではなく、彼ら彼女らが世の中に出て行ったとき、その能力に対して金を出したい、と思われる人材を育成しなければならないと思っています。藝大に入ったからには世界の一流であり、確固たる役割があると思ってもらいたい。日本の一流ではなく、世界の一流なのですから。海外の人たちもここへ来れば一流が学べると思って来ます。しかしその評価に甘えてはいけない。一番になるのは簡単ですが、それを保つのは大変なのです。排出した人材が社会でそれなりの仕事をしなければいけない。ですからここを出て行く学生は、プロであるべきなのです。

研究室床の「安全通路」表示。白線内に物を置くことを禁止する表示。年に2回、学生に対して安全教育を施すなど安全教育は徹底している。教員は安全衛生、危険物取扱など資格をもつ。

イ：今後の抱負をお聞かせ下さい。

桐野先生：今までと同じです。目立たなくても大事な基礎研究をしっかりやっていきたい。それが歴史を担った国立大学の役割だと思います。社会の動きに連動するのではなく、人間にとって普遍的な価値を持つものに力を入れていきたいと思います。

イ：非常に地道な姿勢ですね。東京藝大というと、とても輝かしく、華々しい活躍をする人たちと思いがちですが、実はとても地味な研究の継続なのですね。

桐野先生：学生には「謙虚になれ」と言っています。自然科学というのは分かる人が少ないので、さも分かったように言い切ってしまうこともできますが、我々が見ると奇異な感じがある。すべて分かったような気持ちになるのは怖いですね。きちんとしたデータで証拠を固めていかなければいけない。ここに入学したからといって、まるでカンフー映画を見たあとのように強くなったような気分になるのは間違いです。自分の世界に入ってしまうのではなく、いかにいろいろな人たちと協調して、多角的にものを見ていくか。そして貴重なデータを共有すれば、また新たな発見が生まれるでしょう。人ひとりができることは限られています。協力関係を築いて発展させれば1＋1を3にも4にもしていけるところが、人間の素晴らしいところです。保存科学が前面に出て旗を振るようなことをしてはなりません。一流の人間は謙虚であるべきです。それでこそ他者を理解することができる。謙虚でなければ一流ではありません。

中国復旦大学副教授、陳剛先生（保存科学研究室卒業生）を囲んで。保存科学教室の学生さんと共に。前列左から2番目が桐野教授、右が稲葉教授。

保存科学教室　ゼミの様子。

■終わりに

インタビューを終えて、「あくまで謙虚に」と強調される桐野教授そのものがとても謙虚な方なのだと思いました。「一流」という言葉がこんなにも嫌味なく、さらりと響くのは、その陰で相応の努力をされているからに他なりません。「智」の深淵は掘るほどに深く、その深さを知るからこそ自然と謙虚になられるのでしょう。お話を伺っていて、”noblesse oblige”（持てる者には道徳上の義務が伴う）という言葉を思い出しました。藝大生には日本の代表として、真の意味でのnobleであってほしいと思います。

大学の研究室はどこでも、担当教官の個性が大きく反映されます。東京藝術大学保存科学研究室では、今後も「一流の矜持」と「謙虚さ」が、伝統として継承されていくことと思います。

短時間ではありましたが、本物に触れたひとときでした。ありがとうございました。

※1　用語としての「保存科学」は東京文化財研究所が最初
※2 保存科学研究室年報（2006年度）「保存科学研究室の歩み」、ならびに東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学（保存科学）HP（http://www.geidai.ac.jp/art/graduate.html）　参照

■ 増田勝彦先生と行く

「～和紙の里探訪～紙漉き現場見学ツアー　第2弾」

昨年大好評を博した～和紙の里探訪～紙漉き現場見学ツアーの第2弾です。

今回も紙の研究家として知られる昭和女子大学大学院教授増田勝彦先生をお迎えし、冬の気配漂う日本海側を中心に中国地方を回ります。

増田勝彦先生のレクチャーに加え、漉き手の方々と交流できる貴重な機会です。 是非ご参加下さい。

●日　程：平成22年12月12日（日）～14日（火）

●定　員：30名（先着順）

●参加資格：大学生以上で興味のある人なら誰でも

●スケジュール（下記は交通事情などにより変更されることもありますので、ご了承ください）

【12/12（日）】

13：00　新山口駅（JR新幹線）前出発（貸切バス）　→　千々松工房（徳地半紙）見学〈1時間半〉　→　島根県浜田市に移動/夕食/宿泊　【浜田ワシントンホテル】

【12/13（月）】

午前　三隅町　久保田彰様工房（石州半紙）見学〈1時間半〉　→　午後　三刀町　井谷伸次様工房（斐伊川和紙）〈1時間半〉　→　宿泊/懇親会　【玉造グランドホテル長生閣】

【12/14（火）】

午前　八雲町　安倍信一郎・紀正様工房（雁皮紙）見学〈1時間半〉　→　広瀬町　広瀬和紙製作所（三椏・雁皮・楮紙）見学〈1時間半〉　→　午後　津山 上田手漉き和紙工場（三椏薄紙・箔合紙）見学〈1時間半〉

18：30～19：00　岡山駅着　解散

●参加費：NPOJCP会員：59,000円　／　会員学生：　54,000円
非会員：62,000円　／　非会員学生：58,000円

※現地へ往復新幹線パック料金　→　東京～は上記に30,000円追加で承ります。

東京駅8：10発のぞみ15号乗車で、12：37に新山口駅に到着できます。その他の地方からは、ご相談ください。

※上記料金には、講師料、テキスト代、貸切バス代、宿泊費、食事代（朝2、昼2、夕2）を含みます。

※浜田市のホテルは基本的にシングルです。ツインをご希望の場合は、お申し込み時にお申し出下さい。

※出雲の旅館は4～5人部屋です。2人部屋ご希望の場合は、お一人様あたり3,000円の追加料金を申し受けます。

一人部屋はありません（部屋割りは当方にお任せください）。

※最少催行人員　20名（定員に達しない場合は中止になることがあります）。

●申込・問合せ：NPO文化財保存支援機構（担当：八木）
TEL：03-3821-3264　FAX：03-3821-3265
E-Mail：jimukyoku@jcpnpo.org

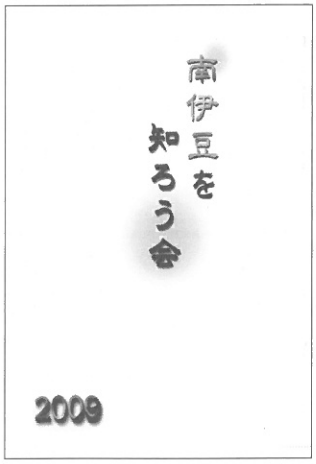
●申込締切：12月7日（火）

氏名、連絡先電話番号、住所、ホテル、旅館2人部屋希望の有無、新幹線手配希望の有無を明記の上、上記までファックスあるいはメールにてお申し込みください。

書・籍・紹・介

『南伊豆を知ろう会2009』

NPO法人　歴史資料継承機構
編集・発行
2010年8月発行
定価　500円＋税
34ページ　A5判



NPO法人歴史資料継承機構（http://rekishishiryo.com/）は2006年から資料保存機関以外に遺された地域資料（主に「古文書」と一般的に称される紙媒体の記録資料中心）の保存・調査活動を展開するために設立された。現在までのところ、静岡県の伊豆地域を中心に6ヶ所での保存・調査活動を行っている。

このような活動は本来自治体が担ったり、大学の歴史を専門とする学科が教育と研究のために行ったりしてきた。しかし、災害・引っ越し・代替わりをはじめ、近年のテレビによる悪影響（「お宝」意識の醸成）の結果、従来の活動では追い付かず、資料が散逸・消滅することがしばしばだ。そのような状況を食い止めたいという意識によって活動が始まった。

その活動のひとつとして、保存・調査活動を行っている地域の方がたを対象とした成果報告会を毎年開催している（『南伊豆を知ろう会』）。これは活動の成果を所蔵者と地域に還元することを目指したもので、昨年度の成果報告会については『南伊豆を知ろう2009』（全34頁　500円）として刊行した。同書は2009年11月28日に開催された成果報告会の4つの報告をまとめたものである。

各内容について、簡単に触れたい（副題省略）。西村「失われた神社の歴史」と武子裕美「上賀茂村における学校」は保存・調査活動を行った南伊豆町渡辺家文書を用いて、これまでほとんど描かれなかった当該地域の近代以降の様相を明らかにした。福澤徹三「「伊豆石」による明治期の建碑について」は東京都青梅市に建てられた石碑が伊豆石であり、伊豆石が近代産業に果たした役割を述べた。飯島正行「紙資料の劣化とその保存について」は地域の人びとに馴染みの薄い資料の劣化と修復という点を丁寧に説明した。当法人では東洋美術学校とともに活動先での修復を進めており、その理解を促進させるためである。なお、同書は子どもたちに少しでも目が向けられるよう、朝倉麻子によるイラストと漫画を掲載した。今後、地域の子どもたちとともに資料を保存・調査の活動をする上で、一助になればと考えている。

ご購入は当法人までご連絡を頂きたい。
e-mail:rekishishiryokeisho@yahoo.co.jp

西村　慎太郎　（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国文学研究資料館準教授）

ご入会ありがとうございました。

（平成21年3月1日現在入会者数）

■理　　事　　8名
■登録会員　　171名
■学生会員　　41名
■監　　事　　1名
■専門評価委員　　1名
■評 議 員　　1名
■賛助会員　　31件
■維持会員　　9名
■一般会員　　84名

株式会社　宇佐美松鶴堂
株式会社　宇佐美修徳堂
株式会社　岡墨光堂
株式会社　桂文化財修理工房
財団法人　元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター
共同精版印刷株式会社
共和コンクリート工業株式会社
国富株式会社　長崎営業所
株式会社　芸匠
株式会社　光影堂
有限責任中間法人　国宝修理装こう師連盟
株式会社　坂田墨珠堂
株式会社　修美
株式会社　松鶴堂
宗教法人　正法院
中部資材株式会社
株式会社　東都文化財保存研究所
日本通運株式会社　美術品事業部
株式会社　半田九清堂
長谷川　聡
百元　節
株式会社　富士海洋土木
株式会社　フレンドトラベル
株式会社　文化財修復技術研究所
株式会社　文化財保存
溝川商店
山領絵画修復工房
他　個人3名
（アイウエオ順）

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

■**登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■**一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

■**賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■**学生会員**：年会費　3,000円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL. 03-3821-3264　FAX. 03-3821-3265
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org
URL：www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替　00120−4−10545　NPO JCP
・三菱東京UFJ銀行　四谷三丁目支店
普通預金　3960340
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
理事　三輪嘉六
・みずほ銀行　根津支店
普通預金　1727893
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS

第22号
2010年11月31日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒110-0008
台東区池之端4-14-8　ビューハイツ池之端102号
TEL：03-3821-3264　FAX：03-3821-3265
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org
関西支部
京都造形芸術大学
日本庭園・歴史遺産研究センター内
TEL：075-334-8450

〈理　　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）　西浦 忠輝（副理事長）
伊原 惠司　白井 久明　増澤 文武
荒木 伸介　沢田 正昭
〈本部事務局〉
八木 三香（事務局長）　松本 洋子
〈関西支部事務局〉
伊達 仁美（事務局長）　加藤 亜沙子
〈編集協力〉
嶋根 隆一（伝世舎）